

『桜の中将』のA類本とB類本

田村俊介

富山大学人文学部紀要第64号
2016年2月
抜刷

『桜の中将』のA類本とB類本

田
村
俊
介

『桜の中将』のA類本とB類本

第一節

松本隆信氏は、「擬古物語系統の室町時代物語―「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語」外―」¹に於いて、『桜の中将』物語の諸本を、A類、B類、C類の三種に分類している。それぞれに基づいた梗概を論文の上段、中段、下段で示した後、C類が最も後出であることを断定なさっている。A類本は

国会図書館蔵「桜の中将物語」後に『室町時代物語大成』²に収録。大成番号は167。
 によって、B類本は、

赤木文庫蔵「こふしみ」後に「小伏見物語」の名で、『室町時代物語大成』に収録。大成番号は150。

と、

天理図書館蔵「小伏見物語」

によって代表されている（以下、本拙稿では、『室町時代物語大成』を『室町大成』と略すことがある）。

このA類本とB類本の先後関係について、

……、結末の違いについては、「若草物語」の場合と同様に、大宮の姫君が住吉明神より与えられた霊薬によって蘇生し、末永く中将与結ばれたとするA類本の方が、新しい改作であると考えるのが自然であろう。ところが、B類本の叙述には、次のような錯雑が見られる。

として、女主人公をはじめ伏見中納言の姫君とするが次には大宮中納言の遺子であると述べられる矛盾、阿波の局が桜の中将の物思いの原因と成った女性の素性を告げられていないのに、突然、大宮の姫君の乳母介の局の方へ行つて、中將の想いを語るといふ飛躍、A類本のように初めに男主人公のあだ名が「桜の中将」であると読者に告げられて居たらよいがそうではないのに、八月十五日の演奏会の際、「そのとしの八月十五夜、めい月なりとて、大りにてさま／＼の御あそひともある中にもさくらの中しやうなくてはとてめされける」とそのあだ名が出て来る（傍線は松本氏に拠る）、などB類本の錯雑を具体的に指摘し、これらはB類本が改作をする際の不手際だったと推定なさっている。そして、

右の如く、B類の方がA類よりも後出の形態であることを示す資料が見出され（……であることを示す根拠が見出され、などとすべきか——田村注）、物語の結末の相違から考えられる関係とは、逆の結果が出てくるのであって、「若草物語」のAB両類の関係と同様である。これはどのように解釈したらよいのか。考えられるのはやはり「若草」の場合と同じく、AB両類よりも更に古い形態があつて、現存の両類本は、それから別途に判れ出た改作本ではないかということである。すなわち、A類本は巻末に中心をおいて改作し、B類本はほぼ原作の儘としながら、巻頭にやや手を加えた結果が、上述の如き現象を呈したものとすれば、最も無理なく両類の関係を説明し得るように思われる。

と続けて居られるが、『室町大成』の前記赤木文庫蔵本（大成番号150）の扉のところでは、

また、國會本だけでは、難波の浦でこがれ死にをした大宮の姫君は、住吉明神より与えられた霊葉によって蘇生し、中将と末長く結ばれたという風に物語の結末が反対になっている。これは新しい改作のようにも見える。

しかし本文は、國會本が一番整つていて、古そうに見える。「小伏見物語」との前後関係（B類本との先後関係のこと——田村注）には、今後検討しなければならぬ問題が多い。

と断定を避けた言い回しをして居られる。

本拙稿第二節では、松本氏の結論を支持する立場から、結末以外の部分について『平家物語』引用の部分を手掛かりにA類本の古態性を、本拙稿第三節でも、やはり松本氏の説に賛同し、結末について謡曲引用を手掛かりにしてB類本の古態度を裏付けて行きたい。氏に倣い、A類本は、国会図書館蔵本（大成番号167）に代表させることにするが、B類本の二本の優劣について、赤城文庫蔵本（大成番号150）の扉のところで、

天理本の本文には、何故か誤脱が多く、文意のつづかない所が、少なからず見られる。

とされているので、赤木文庫蔵本によって、代表させることにする。

第二節

たかみつ、あだ名が桜の中將は、或る日、宮中で一四、五歳程の控えめな様子の姫君と目が合い、興味を引かれる。その時は、帝からの呼び出しがあったため、「ちからなく」演奏会に参加したが、腹心の部下播磨の守に後を付けさせる。二条大宮に居ることが判明する。そこで、播磨の守を含む数名のお供の者を引き連れて、二条大宮に車で赴くが、二条大納言とその妻が死去していたため、邸は荒れ果てていた。その荒れ果てた様子が、A類本では、次のように描写されている。尚、『室町大成』は、私なりに作った釈文に直して引用するが、論旨の上で重要とおぼしき部分は、『室町大成』の表記のままにすることがある。

□ 門を見入りて通り給へば、ついちはあれ共、お、いなし、もんはあれとも、とひらなく、庭には色々の草茂りて、人の通ひも跡絶えて、さすがいにしへ人のあまた住みたるとおほしくて、広々と作り並べたる棟の数あまたありけれども、主無き宿と荒れ果ててものあはれなるありさまなり。（桜の中將）「かかる所に、いかがして住み給ふらむ」と、いつしかいたはしく思して、御供に召し具したる隨身を召して、（桜の中將）「この辺りにて、『ここは、いかならん人の住む家ぞ』と、尋ねよ」と宣へば、

（五五六頁下段三行目～一三行目）

B類本と比較してみると、次のようにやや大きな違いがある。

□ 1 つるちはあれとも、おほひもなく、軒の忍ぶもうち茂りけり。人氣稀なる住居にて、いとものさびてぞ見え侍りける。（桜の中將）
 「世にあはれなる様なり」とひとしほ思ひ続け、隨身を召して、「これは、いかなる人の住処ぞ」と宣へば、

（五六頁下段七～一〇行）

全体に、B類本のほうが簡略に成っていることが分かるが、特にはじめに「もんはあれとも、とひらなく」に相当する句がない。どちらが原型に近いのであろうか。

『平家物語』卷三「少將都帰」に次のような一節がある。

鹿ヶ谷に於ける反平家秘密会議が一一七七年発覚、西光は即座に死刑、藤原成親は表向き流罪でひそかに処刑、その他にも鬼界ヶ島へ流される者などがあった。一一七八年中宮安産を祈念するため恩赦、平清盛の恨みが深かった俊寛を鬼界ヶ島に残して、藤原成経は都に向かった。その年は肥前国鹿瀬荘で越したが、一一七九年春、遂に鳥羽に到着した場面である。

同三月十六日、少将（＝藤原成経）鳥羽へあかうぞ着き給ふ。故大納言（＝藤原成親）の山庄、すはま殿とて鳥羽にあり。住みあらして年へにければ、築地はあれどもおほひもなく、門はあれども扉もなし。庭に立入り見給へば、人跡たえて苔ふかし。鹿ヶ谷事件からたかだか二年しか経っていないのに「住みあらして年へにければ」はいささか気にかかるが、「すはま殿」の荒廢は藤原成親の指示を受けて家屋や庭を整備する者がいなくなったことを示している。『桜の中将』A類本の原拠となったこと疑いあるまい（この指摘は、平成二五年度前期日本文学講読に於ける山下裕加氏の発表に拠る）。B類本との関係も示せば、

【作品前半に於ける想定一】

『平家物語』卷三「少将都帰」

ほぼそのまま引用

『桜の中将』A類本

「ついちあはれ共、おゝいなし」と「もんはあれとも、とひらなく」は同内容なので、どちらか一つだけでよいと判断、後者を削除

『桜の中将』B類本

のようになる。

【作品前半に於ける想定二】

『平家物語』卷三「少将都帰」

「築地はあれどもおほひもなく」と「門はあれども扉もなく」は同内容なので、どちらか一つだけでよいと判断、後者を削除

『桜の中将』B類本

「門はあれども扉もなく」のような言葉を補う。

『桜の中将』A類本

のように考えると、A類本書写者は、B類本の「つゐちはあれとも、おほひもなく」のような一節だけを見て、原拠が『平家物語』のこの箇所と特定できたかどうか大いに疑問が残るし、『平家物語』を引用する際には簡略を旨とするというB類本書写者の意図を無視して、原拠となった箇所から文言を取って継ぎ足しした、などということは到底考えられない。やはり、【想定その一】のほうが【想定その二】などよりも遥かに自然であると思うのである。

第三節

物語の中盤、孤児の大宮の姫君一人を愛する桜の中将に、徳大寺殿の娘との縁談が持ち上がる。桜の中将はしぶしぶ徳大寺邸へ通うが、なじめず、夜深く退出することが多かった。桜の中将の父である大納言は、徳大寺殿との関係を重視し、桜の中将の心がその娘へと向かうように、奸計を用いて、大宮の姫君を都から追放した（五七八頁下段〜五八一頁下段四行目）。やがて、難波の尼君のもとに身を寄せるのであった（五八六頁上段）。

大宮の姫君を探すため、桜の中将も都を後にする（五九〇頁下段）。まずは、天王寺へと参り、もう一度大宮の姫君と会わせて下さいと深く祈願するが、次に住吉大社へと向かう（五九二頁下段）。

ちよūdōその頃、難波の里では大宮の姫君が病に倒れ、衰弱一方となった（五九四頁上段）。やがて、十念を唱え、眠るように逝去するのであった（五九六頁下段）。

住吉では、桜の中将が幻で、年老いた翁に、大宮の姫君は難波に居ると教えられる（五九七頁上段〜下段）。難波のどこかがわからぬまま、そちらへと向かうが、日が暮れたので、「しつかふせや」に宿を借りる（五九八頁上段）。その「しつかふせや」、即ち、賤が伏屋の主人である翁が、桜の中将に語りかける場面は次の通りである。A類本を引用する。

□ 賤が伏せ屋の主の翁、寢覚して、念仏申しけるが、これを聞き奉り、（翁）「この度のまれ人は、さらにまどろみ給はず、よもすがら念珠の御声、耳に染みて、尊くこそ候へ。年衰へて、けふあすしらぬせう、などか、打ち解けて寝る、恐ろしさよ。さても御旅人は、いかなる人にてましますぞや。御寢覚がちなるに、物語申して慰め申さむ。ここに、あはれなる事の候ふぞや。この川波を隔てて、向かひの岸に、細道の奥なる家は、京の人、尼君にて侍る。都よりうつくしき女二人、流されておはしますすが、都に殿も公達もある人（都に夫も息子も居る女性、即ち、大宮の姫君）にてましますよし、申し候ふが、明け暮れ、思ひに沈み果て、耐へぬ嘆き（我慢できない嘆き。或いは、絶えぬ嘆き、ひっきりなしの嘆き、か）にて渡らせ給へども、問ひ来る人もなく、かすかなる有様にて、明かし暮らし給ふが、いよいよ日数経るままに、思ひの数積もりて、昨日の昼程に、恋ひ死にに死じ給ひ候ふよし、申し候ふ。よその袖まであはれなり。都の人にてましますば、もし、知らせ給ふ人にて渡らせ給ふ」と語りつつ、ほろほると泣きけり。あはれを知れる有様なり。

又、語るやう、(翁)「恋にて死にたる人は、左右無く魂去り果てず、神・仏の方便なれば、生き返ると承り候ふ。それも、思ふ人の使ひなど来たり、葉を与へて見ると承り候ふ。まして、思ふ人ならば、即ち、生き返るところ申し候へ」と、語りければ、

(五九八頁下段七行目〜五九九頁上段一六行目)

この翁から、この後、葉をいただき、それを持って、難波の里へ赴き、死んだ大宮の姫君の「御くちに、入て見給」うたところ(六〇一頁上段一八行目〜下段一行目)、すぐに効果が現れたという程でもなかったが、二度三度と投棄した結果、ついに蘇生したのであった(六〇二頁上段)。B類本では、大宮の姫君が十念を唱えて、眠るように逝去した後、「さて、あるへき事ならねはとて」、茶毘に伏され(八一頁上段〜下段)、蘇生は無い。

A類本の□の場面は、謡曲「高砂」を想起させる。

謡曲「高砂」では、ワキ・友成が、従者とともに、

今を始めの旅衣、今を始めの旅衣、日も行末ぞ久しき。

と着キゼリフを述べ、

そもそもこれは九州肥後の国、阿蘇の宮の神主友成とはわが事なり。われいまだ都を見ず候ふほどに、このたび思ひ立ち都に上り候。またよきついでなれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候。

と名乗る。その高砂には、竹杷を持って落葉を掃く老人が居た。老人がシテ、老人の妻である姥がツレである。

ワキ「里人を相待つところに、老人夫婦来れり。(シテへ向き)いかにこれなる老人に尋ねべき事の候。

シテ「こなたの事にて候ふか、何事にて候ふぞ。

ワキ「高砂の松とはいづれの木を申し候ふぞ。

シテ「ただいま木蔭を清め候ふこそ高砂の松にて候へ。

ワキ「高砂住の江の松に相生の名あり。当所と住吉とは国を隔てたるに、何とて相生の松とは申し候ふぞ。

シテ「仰せのごとく古今の序に、高砂住の江の松も、相生のやうに覚えとありさりながら、この尉はあの津の国住吉の者、(ツレへ向き)

これなる姥こそ当所の人なれ。知ることあらば申さ給へ。

ワキ「不思議や見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山国を隔てて住むと、言ふはいかなる事やらん。ツレ「うたての仰せ候ふや、山川万里を隔つれども、互ひに通ふ心づかひの、妹背の道は遠からず。

シテ「まづ案じても御覽ぜよ。

ツレ「向かい合つて高砂住の江の、松は非情の物だにも、相生の名はあるぞかし、ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともにこの年まで、相生の夫婦となるものを。」⁴

以上の対話に基づき、『桜の中将』A類本の「けふあすしらぬせう」の「せう」は尉という字をあてるべきだ（「けふあすしらぬ」は、「今日明日知らぬ」と思うのである）。

やがて、老人は住吉明神の化身であることが明かされ、船に乗って、住吉に向かう。そして、友成に住吉で待つと伝え、友成は、高砂や、この浦舟に帆をあげて、この浦舟に帆をあげて、月もろともに出で潮の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住の江に着きにけり。

ということに成るのである。

旅人の旅の方向が、『高砂』の場合、西（肥後国阿蘇）から東へ、『桜の中将』の場合、東（天王寺、住吉大社）から西へ、というように正反対ではあるが、その旅人に老人―媪も一緒に成つてであるが―が夫婦愛の強さを教える、という根底のところまで一致するのでなからうか。だとすれば、

【作品終盤に於ける想定一】

『桜の中将』 B類本

謡曲「高砂」を見て聞いて、霊的な要素を織り交ぜながら、大宮の姫君が蘇生する筋立てに改変

『桜の中将』 A類本

が自然である。もし、

【作品終盤に於ける想定二】

謡曲「高砂」

『桜の中将』 A類本

霊的な蘇生という話を削除

『桜の中将』 B類本

ということであれば、『桜の中将』A類本で、何故、大宮の姫君の滞在先が「なには」であるのか、全く不明である。滞在先は「なには」よりも西の高砂にたくなるはずだ。その意味で、想定二は不自然なものはなからうか。想定一の場合、A類本の書写者は、自分が見ているB類本に於いて大宮の姫君が「なには」に滞在しているのを敢えて変更すればあまりにも大がかりな書き換えになるから、そのようなことをしなかったと考えることができると思うのである。

第四節

作品の序盤中盤について、或る系統の本文が古態性を持ち、終盤はその系統よりも別の系統が古態性を持つ、という松本氏の論文を知ったとき、いささかの困惑があった。果たしてそのようなことがあるのだろうか。『義経記』全八巻は、巻一―巻六、巻八が第二系列が古態性、巻七は第一系列が古態性を持っている⁵。しかし、『義経記』は長編と言ってもそれほど言い過ぎではない程の長さを持ち、巻ごとの独立性が強く、少なくとも巻七は前後の巻から完全に独立している。『桜の中将』でも、同じようなことが言えるのであろうか。そこで、本拙稿では、二つの観点から考えてみた。その結果、やはり松本氏の言われる通りであったことがわかった。

東京堂出版『お伽草子事典』⁶の「桜の中将」の項には、謡曲「高砂」に触れるところがない。同事典のはじめには、「お伽草子への招待——序言に代えて——」と題され「平成十四年葉月の末つかたに誌す」で終わる、編者徳田和夫氏の二頁の序文が置かれているが、その二頁目の一四―一五行目には、

編者はその原稿すべてに目を通して表記等の統一と細目の充足を図り、また必要と判断した場合、加筆を行った。

と記されているから、「桜の中将」の項の内容は、執筆者として署名なさっている箕浦尚美氏と徳田氏との共通認識だということになる。神田龍身氏西沢正史氏編勉誠出版『中世王朝物語・御伽草子事典』⁷には「桜の中将」の項が無いし、今後も、『桜の中将物語』の研究が進められる際第一に尊重される文献は徳田氏編『お伽草子事典』であろうが、私は、同事典「桜の中将」の項に記載がない謡曲「高砂」を座右に置いたほうが、或いは、念頭に置いたほうが理解が深まると思うのである。『桜の中将物語』も、霊的な要素を伴った夫婦愛の物語だからである。少なくとも「年衰へて、今日明日知らぬじょう」の「じょう」に漢字を宛てるには、どうしても謡曲「高砂」

が必要なのである。勿論、「じよう」でなくとも、「せう」「ぜう」「せふ」「ぜふ」「せぶ」「ぜぶ」「せぶ」「じやう」「じやう」「しよう」などに漢字を宛てても構わないのであるが、それは出来ない。謡曲「高砂」という参考資料があつて初めて読解が可能となるのである。

更に言えば、『桜の中将』A類本で、桜の中将が、翁からいただいた薬を手にとろうとしたとき、翁の住む賤が伏屋が、実は松の木であつたことに気付かされた。そのあたりの敷衍を引用する。

㊦ 嬉しくおぼえて、彼を取りて、出で給はむとし給へば、家もなき松の木の下なり。今まで物申しつる翁もなかりけり。(桜の中将)
「さては、住吉の明神の御教へなり」と尊く、たのもしくて、……

(六〇〇頁上段五〜九行目)

住吉明神は松の木の精であり、その松の木が一時的に翁とその住処となつて、桜の中将の目の前に現れた。いかにもそのように読ませる書き振りなのであるが、謡曲「高砂」でも、高砂の地で、シテとツレが、住吉へ船出する直前に、

今は何をかつつむべき。これは高砂住の江の、相生の松の精、夫婦と現じ来りたり。

と名乗りを挙げたことを想起せずには居られないのである。⁸⁾

注

『桜の中将』の先行論文については、国文学研究資料館の国文学研究論文データベース、及び、国会図書館雑誌記事索引で検索し、ヒツトしたものは全て読ませて頂いた。検索した日は、平成二十七年八月一日である。

1 『斯道文庫論集』第四号。昭和四〇年。

- 2 横山重氏松本隆信氏編。角川書店。国会図書館蔵『桜の中將物語』と赤木文庫蔵『こふしみ』が収められている第五巻は昭和五十二年刊行。
 - 3 『平家物語』の引用は、小学館発行新編日本古典文学全集に拠る。
 - 4 謡曲「高砂」の引用は、小学館発行新編日本古典文学全集『謡曲集』第一分冊に拠った。観世流である。
 - 5 佐藤陸氏『義経記と後期軍記』。双文社出版、平成十一年。
 - 6 平成十四年。
 - 7 平成十四年。
 - 8 謡曲「高砂」の引用は、注4で記した通り、新編日本古典文学全集『謡曲集』第一分冊に拠ったが、天野文雄氏土屋恵一郎氏中沢新一氏松岡心平氏『能を読む第二巻 世阿弥 神と修羅と恋』(角川学芸出版、平成二五年)も参照させていただいた。同書に拠れば、「これは高砂住の江の、相生の松の精」の箇所「これは高砂住の江の、神ここに相生の」の異文があるという(金春流、金剛流、喜多流)。
- 堂本正樹氏は『世阿弥の能』(新潮社、平成九年)で、次のように述べている。「老人夫婦の素性は、現在も観世・宝生は「相生の松の精」であり、金春・金剛・喜多は「神ここに相生の夫婦」となって現れたとされており、どちらが古いとも決められません。ここに底本とする『伝観世小次郎信光自筆本』は観世ですから、松の精が夫婦と化身して出現したとします。／この「精」と「神」はどう違うのか。これは『弓八幡』でも触れたように、位の低い神としての精だろうと思います。そうした下級の神格が参詣者を歓迎して接待するのが、中世の意識として正常だったのでしょう。ものの生命の核を擬人化した「精」と、観世などの猿楽者の演じ得た「神」は、甲乙の付け難いものだったに違いありません」(一九七頁)
- しかし、神が現れたにせよ、精が現れた場合と同じように、『桜の中將』A類本と類似していることができるだろう。

〔平成二七年九月二一日提出〕